

**問いをもち、相手意識・目的意識を明確にしなが  
表現力を高めようとする子ども**

— 小学4年「林間学校で心に残ったことをプレゼンテーションしよう」の実践から —

**1 単元のねらい**

林間学校で経験してきたことについて、自分の伝えたいことが相手により分かりやすく伝わるように、事例や理由を挙げるなど、内容や話し方の工夫をしながら話すことができる。

**2 授業の構想**

**(1) 子どものとらえについて**

本学級では、昨年度から朝の時間に、スピーチを行っている。話すことが苦手な子どもも、他者のスピーチを参考にしながら自分のスピーチの質を上げようとしている。ただし、聞いている人にとっても分かって欲しいという意識は十分に高いとは言えない。その意識が、話す内容や話し方から伺える。

昨年度、読むことの学習で昔話の語りを行った際に、「自分の選んだお気に入りの昔話のおもしろさを隣の学級に伝えたい」という目的意識・相手意識を強く持ち、意欲的に学習に取り組んだ。自分の願いを達成するためにはどこを強調して語ったらよいか、昔話のおもしろいと感じるポイントを読み取ったり、場面の様子や登場人物の心情が伝わるようにするためにはどのような工夫があるのか考え実践したりした。このように、目的意識・相手意識が明確になった学習において、よりよい語り方を求めて主体的に学習に取り組んだ。また、図表や写真などから読み取ったことを基に表現する学習を行った際には、分かったことを羅列するのではなく、注目する点を決めて、それについて分かったことや考えたことを表現することができた。このような学習を積んで来ている子どもたちに、伝えたくてたまらない題材を設定し、その中から何を伝え、どのような方法で伝えるのかという課題を設定することができれば、表現にこだわり、工夫して伝えようとする姿が期待できると考える。

**(2) 本単元の内容と国語科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて**

以上のような実態と、教科構想を踏まえ、本単元では次の三つの姿を求めたい。

- ・ 目的を達成するために、伝える内容や伝え方について工夫する姿
- ・ 自分の表現について振り返り、その方法について吟味する姿
- ・ 全体での学びや、他者の表現のよさを自分の表現にいかそうとする姿

以上の三つの姿に近づけていくために、本単元では林間学校を題材として扱い、林間学校で心に残ったことを保護者に伝える学習活動を設定する。

林間学校は本校の宿泊研修の一つである。子どもたちにとっての位置づけが大きい行事であり、保護者も同じように感じている。すなわち、話し手・聞き手共に関心の高い題材であるため、話し手が目的意識・相手意識を強くもつ学習となり得る。子どもたちは、この行事を通して個としても集団としても成長したいと願っている。子どもたちの発表は単に経験したことの羅列ではなく、本人が感じたこと、考えたこと、振り返って改めて発見したこと等が挙がるであろう。そして何よりも、自分たちの経験や成長を知って欲しいという意味で、伝えたいという必然性も高くなると考える。また、その場に居合わせていない相手に伝えるという点で明確な相手意識も働くと考えられ、何を話すのか、どのように話すのかといった工夫も必然的に生まれるのではないかと考えた。

(3) 本単元の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について  
以上のような題材のよさを踏まえ、以下の点について留意して本単元を展開する。

**① 伝える相手の明確化と目的の明確化**

本単元における聞き手は子どもたちの保護者である。ただ、「おうちの人に伝えよう」では、相手意識は明確ではない。おうちの人に伝えるとはどういうことを考えるようにする。そこにある相手意識は、「実際に経験していない」、「おおまかな日程は知っているが具体的な細かいことは知らない」、「みんなが感じたこと・考えたことは伝えないと分からない」等が挙げられるだろう。厳密に言うと、一つ目は、実際に見ていない、聞いていない等、細かく分類できる。こうした点まで考えることが相手意識であり、何をどのように伝えるのかを考える際の拠り所となり、モニタリングの共通の視点となる。また、単元を通して自らの表現を追究し続けることができるように、何のために伝える活動をするのか、そこにある子どもたちの願いを単元の導入の時点で十分に耕し、全体で確認する。

**② 伝える内容・相手に応じた表現**

本単元における発表会は、話し手である子どもたちと聞き手である保護者が共に情報を共有することができるように、プレゼンテーションという形式をとっている。4年生児童にとって、前述した相手意識を現実の発表に反映させることは、言語だけでは難しい面もある。そこで、より分かりやすく筋道を立てて伝えるための手立てとして、考えの根拠となる写真や資料を使って話すことを取り入れようと考えた。ただし、発表の形式以前に、何を伝えたいかが最も重要であるため、そのために何ができるかを考えられるようにしたい。

**③ 他者・自己によるモニタリング**

本単元では、他者によるモニタリングと自己によるモニタリングを取り入れようと考えた。他者によるモニタリングはこれまでの学習においてその有効性は明らかである。自己によるモニタリングは、他者からのアドバイスがより理解できると共に、自分の話し方について振り返る性格が強いと考える。聞き手の立場に立って自己の発表を振り返ることにより、工夫を考えるだけでなく、それを実践することを可能にしたい。

**3 展開計画 (全11時間)**

次	主な学習	時	具体的な学習活動
1	何を伝えたいのかみんなで話し合おう。	1・2	・ 林間学校で経験したことの中から、どんなことをおうちの人に伝えたいのか話し合うと共に、どのような伝え方ができるのか考えることで、発表会に向けた意欲を高める。 ・ 発表会の計画を立てる。
2	グループで、何をどのように伝えるのか考えよう。	3 4~6 7 8 9	・ おうちの人により分かりやすく伝えるためのポイントを、全体で話し合い、明らかにする。 ・ グループで何を伝えたいのか、グループで話し合い、決定する。 ・ 役割を分担し、発表について考え、準備をする。 ・ グループで練習する。 ・ 中間発表会を開き、グループ間でお互いの発表をモニタリングし、自分の発表を振り返る。 ・ 修正を加え、練習をする。
3	発表会を開こう。	10 11	・ 発表会を開く。 ・ 学習のふりかえりをする。

#### 4 授業の実際

##### (1) 追求の原動力となる相手意識・目的意識の明確化

###### ① 子どもにとって必然性のある学習の対象の設定

本単元では、子どもの追求が続くために、子どもにとって伝えたいという思いが生まれる必然性のある学習の対象を設定する必要があると考えた。そこで、今回は、本校の4年生の子どもたちが共通して強い思い入れをもっている行事である「林間学校」を学習の対象とした。当然、林間学校を終えた子どもたちは経験したことを家庭で話している。しかし、学級全体で情報を共有した際に、自分以外の班ではこんな出来事が起きていた、友だちは自分とは異なる思いをもっていた等、家庭における報告の中では伝えきれていない子どもがいた。また、自分のことだけでなく、4年生全体のことについて(集団として成長したこと等)、もっと伝えたいことがあることに気づき、さらに表現に関する意欲が増すなど、「林間学校」を学習の対象として取り上げたことは、やってみてみたい、考えてみたいという追求の原動力となった。

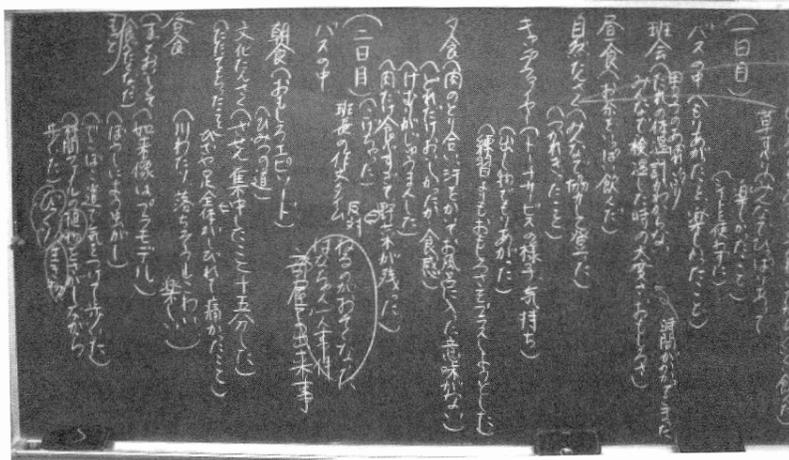


図1：林間学校の思い出を共有した際の板書

###### ② 単元のめあての設定

単元の導入では、まず、〇〇に伝えたい、□□を伝えたいという思いを強くもつ事が大切だと考えた。それは、単元を貫く追求の原動力になると考えたからである。スライドで林間学校を想起すると、全員がこの時の思い出を振り返り、どんなことがあったのか、そこでどんな思いを持ったのか、自分の考えを次々と発表した(図1)。そして、たくさんのおもひを出し切ったところで、これらの思い出を誰かに伝えたいという願いをもった。また、これらの思い出は、子どもたちの中で「心に残ったこと」という言葉に整理された。そして、誰に伝えたいかということについては、1年生や、来年度林間学校を経験する3年生などいくつかの候補が挙がったが、その中でも保護者に聞いてもらいたいという気持ちが強かった。そこで、単元のめあては「林間学校で心に残ったことをおうちの人に伝えよう」に設定された。また、学習の計画を立てる際には、これまでのスピーチの学習とのつながりから、「より分かりやすく」、「より伝わるように」というここではまだ個々がそれぞれの考えをもっている段階のものではあったが、目的意識を明確にすることにつながるめあてとなった。

###### ③ より目的意識を明確にするはたらきかけ(ゴールを明確にする)

単元のめあてを設定した後に個々の思いをふりかえり等で探ると、まだ目的が明確になっていなかった。そこで、発表のゴールを考える時間を設けた。一人の子どもが書いた「おうちの人に林間学校に行った気になってもらいたい」という、プレゼンテーションをする目的が明確になっている前時のふりかえりを紹介し、その話を聞いた子どもたちの一人一人がどのような思いをもっているのか出し合った。出し合ったことをまとめると「大山に行ってみよう」と「林間学校を通して成長したね」という大きく分けて二つのことをおうちの人たちに感じて欲しいという思いをもった。ゴールを明確にしたことで、次に示す授業後のふりかえりに見られるように、子どもが何を伝えたらよいのか見通しがもてるようになり、子どもの意欲の高まりが見えた。

学んだね、成長したね、がんばったねを思ってもらえるには、自ぜんたんさくや文化たんさくを入れた方がいいと思います。理由は、みんなが1番がんばったと思う場面だからです。(中略)今回の授業で発表会の最終目標が見えてよかったです。この学んだね、成長したね、がんばったねや今度行ってみようなどの気持ちになってもらえるように、一生けんめいがんばりたいです。ぜったいに発表会を成功させたいです。(児童A)

また、この目的意識は同時に、おうちの人には「きっとこんなことを聞きたいと思っているだろう」「きっとこんな話し方をしたら伝わるだろう」などの相手意識にもつながっていった。

###### (2) 他者によるモニタリング(新たな問いが生まれる)

相手意識・目的意識を明確にしたところで、個々でスピーチ原稿を作成した。その後、新たな視点で自分のスピーチを見直すために、2度の他者によるモニタリングを行った。1度目は林間学校で同じ班で活動したメンバーと行き、2度目は林間学校で班が異なるメンバーと行った。2度行うことは計画していたことだが、子どもの意識の中にも班が異なるメンバーに聞いて欲しいという願いがあった。それは、自分たち(同じ班のメンバー)しか知らない内容が相手に伝わるのかどうか試したいという思いからだった。以下に示しているものは、モニタリング後のふりかえりである。

〇〇くんが「終わりに伝えたいことやその前にも伝えたい事を話すといんしょうに残る。」と言っていたので、伝えたいことを最初に言ってしまうと印象に残らないのではないかとアドバイスを聞いて思いました。(児童B)  
ぼくは〇〇さんの1番わかりやすくいいと思いました。わけは、絵とか写真のところで説明をしているからです。なので、〇〇さんの工夫をしてみたいです。(児童C)  
今日、他の班の聞いてみて3班(自分の班)の人とちがうアドバイスをくれました。例えば、「写真のポーズを実際にやってみたら」や、「山のポーズがブリッジだったことを言ったほうがいい」などがあったので、それをやってみたいし、他の人を聞いて、たとえを使っていたのでそれをやってみたいです。(児童D)

3名の子どもふりかえりから分かるように、モニタリングを行ったことによって、新たな問いが生まれたり、追求に広がりが見えたりしている。児童Bはアドバイスを受けたこと、児童Cは他者の発表を聞いたこと、児童Dはアドバイスと発表の両面から自分のスピーチを見直そうとしていることが分かる。児童Bはスピーチの前半に、座禅のことを述べ、後半に歴史や文化について述べようとしていた。しかし、児童Bが最も伝えたかったことは歴史や文化ではなく、座禅をしている時の様子や心の動きのことであった。他者からのアドバイスを受けたことで問いが生まれ、結果として話す順序を入れ替えた。

###### (3) 全体の学び合いの中で個々の追求を見直す(学級全体の問いが生まれる)

###### ① 学び合いの実際(第6時の授業の様子から)

前時まで、より伝わりやすくするための工夫は全体でも個々でも考えられていた。子どもたちの中で「くわしく伝える」ということがより伝わるための追求のキーワードになりつつあった。前時に同じグループの中でモニタリングを行った後も同様であった。そこで、個々の追求を見直すために、板書を工夫したり、意図的に子どもの発言を掘り下げたりする等、教師がはたらきかけることで肯定的なアドバイスをもう一度吟味する活動を行った。以下はその授業記録である。

T1 : (一番たくさん意見が集まっているところを指して)ここはたくさんあるけれどいったいどんなよかつた事が集まっているかな。  
児童E : 何をしたかが分かるころ。  
児童F : 「どんな」が多い。  
児童G : どんな様子かについてのことが多いかな。  
児童H : 細かくてくわしい(板書)  
T2 : みんなの発表を聞いていると、ここがものすごく多くて伝わりやすさの工夫になっていることが分かるね。細かく説明できたり、くわしく話せたりすると聞いている方には伝わりやすいんだね。  
T3 : じゃあ、スピーチ原稿でくわしく説明できるところを増やしていけるといいね。  
児童H : でも。

T4 : でも何？  
 児童(複数)：全部くわしくするのは・・・  
 T5 : 何か考えているね。全部くわしくすると？  
 児童H：全部くわしくすると長くなっちゃう。  
 児童(複数)：長くなるし、全部くわしくするのはちょっと。  
 児童(複数)：全部くわしくすると多くなっていっぱい書かないといけなくなる。  
 T6 : 長くなるとどうなるの？  
 児童I：えっ、原稿用紙2枚こえるし。  
 児童(複数)：くわしすぎるようになる。(つぶやくように)  
 T7 : くわしすぎるってどういうこと？いいんじゃない？  
 児童J：くわしすぎると分かりにくくなる。  
 T8 : 何が？  
 児童(複数)：伝えたいことが何か分かりにくくなる。  
 T9 : なるほど、これはみんな納得なの？  
 児童(複数)：納得  
 T10 : 今までくわしくすることは大事だって言ってたのにちがうね。新しい発見だ。  
 T11 : 伝えたいことがくわしくなるのはどう？  
 児童(複数)：それはOK  
 T12 : へー、伝えたいことはくわしくなってもだいじょうぶなんだ。  
 T13 : じゃあ、みんなのスピーチで伝えたいことってなんだっけ。  
 ここで首をかしげる児童あり、すぐに手が挙がる児童あり。  
 児童K：わたしは野外活動で中ノ原のことを話すんだけど、その中で協力できたことが一番伝えたいです。  
 T14 : Kさんは、野外活動の事を話すけれど、その中でも協力できたことが伝えたいんだ。  
 児童L：わたしは、班会の事を話すんだけど、班会で協力したことと班会で集中したことと協力したことを伝えたくて、でも、集中できたことが伝えたいと思って、それは成長したなと思ってもらえることにつながるからです。  
 T15 : 班会で集中したってどういうこと？  
 児童M：集中してみんなの話をきくことができたことです。  
 この後、次々と自分が伝えたい事(絞られたもの)の発表が続く。

児童Hの「でも」という立ち止まりから、それぞれ個々が追求していた方向性に、全体が疑問をもち始めていることが分かる。これまで、個々でプレゼンテーションを作成していく中で、より伝わるような工夫は、言語レベル(構成や内容)、非言語レベル(写真、絵・図、動作など)で考えられていた。しかし、本単元で身に付けていきたい力は、単に工夫を使うことではなく、こうした工夫を使うことの意味を考えることである。追求の方向性としては見直しが必要であった。つまり、自分の伝えたいことを中心がはっきりしておらず、経験したことをできるだけ詳しく伝えようとしていた子どもにとっては、自分の追求の方向をもう一度立ち止まって考えるよい機会となったことが分かる。

## ② 追求を見直すための具体的な手立て(スピーチに題名をつける)

自分の追求を見直すための具体的な手立てとして、スピーチに題名をつける活動を行った。これにより、話の中心となるキーワードが具体化されて、何を取り上げて、どのように表現したらよいかなど、スピーチを見直すきっかけとなった。

自分の追求を見直している実際の姿としては、発表原稿の内容を修正したり、自分が一番伝えたいことについてより関わりの深い写真に変更したりするものが見られた。

図2は、児童Nの第6時の授業のふりかえりと第7時の授業のふりかえりである。第5時で子どもたちはお互いにスピーチを聞き合った後は、特に内容

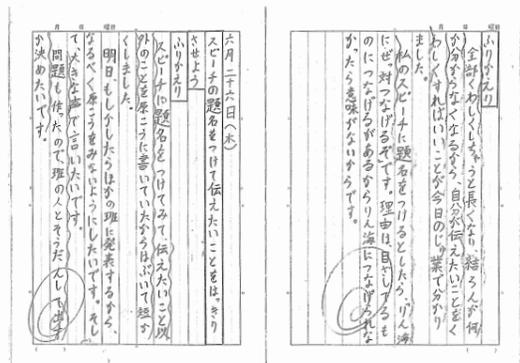


図2：児童Nの授業のふりかえり

については疑問を感じておらず、むしろ話し方について修正を加えたいと考えていた。しかし、全体の学び合いで自分が伝えたいことを詳しくすることが大切であることに気が付いた児童Nは、次時では、自分のスピーチ原稿を見直し、余計な部分を原稿から省いている。

また児童Oは、当初プレゼンテーションに図3の写真を用いようとしていたが、題名をつけた後、図4に変更している。題名が「助け合い協力して登った中の原」であるため、そこで見た景色よりも、実際に助け合っている様子が分かるものに変更したのである。

このように、スピーチに題名をつけることで、どこをくわしくしたらいいのかはっきりさせることができる。例えば、具体的なエピソードを入れる、その様子が分かるような写真を使う、動作を入れるなどの、くわしく伝えるための工夫をすることのよさを実感し、実際のプレゼンテーションに活用することができた。こうした立ち止まりは、一番伝えたいことについて工夫することが、結果としてより内容が伝わる発表になり、自分たちがおうちの人にこう感じて欲しいという当初の目的意識を再確認することにもつながっていった。



図3：プレゼン写真 前



図4：プレゼン写真 後

## 4 おわりに

本実践において、学習の対象を学習に向かう必然性のあるものに設定したことは、単元を通した目的意識をもって学習に取り組むことができたという点で有効であった。これは、意欲面や、国語科におけるつけたい力の両面においていえる。また、表現活動を行う際に相手意識・目的意識を明確にしたことは、追求の原動力となった。単元の前半で丁寧に時間をかけてはっきりさせることで、自分のプレゼンテーションでは何を伝えたらよいかという内容面とどのように伝えたらよいかという技能面の両方の工夫について、考えるための基盤ができ、その結果問いが続いていった。そして、プレゼンテーションという発表形態をとったことは、伝えたいことを絞り、より伝わるための工夫を考えるうえで有効であった。さらに言うと、非言語の工夫を有効に使うことを考えることは、伝えたいことを中心をはっきりさせ、その伝えたいことの根拠となる具体例や理由を補うものになった。モニタリングを含め、個々の追求の方向性を見直したり、よさを感じたりするための学級全体で立ち止まる活動を設定することは、個々の追求を深めたり、広げたりするうえで有効であることも確認できた。

課題としては、モニタリングの視点が絞り切れていなかったことで、聞き手がどこに意識を向けていったらよいか分かりにくかった。4年生の発達段階におけるプレゼンテーションということ考えると、話の構成や内容に関わる部分、写真や動作など非言語の部分、話し方に関わる部分といった、少なくとも3つの視点をそれぞれ吟味していく段階が必要ではなかったかと考える。つまり、発達段階に応じたモニタリングの形や段階があるということ見えてきた。自己モニタリングのあり方も含め検討していきたい。

(文責 恩田 一穂)